

日本民家園だより

特集 旧清宮家住宅

vol.60



企画展示「清宮家—登戸に生きる—」
2006年1月5日(木)～5月28日(日)
『日本民家園収蔵品目録5 旧清宮家住宅』刊行

【清宮家住宅】

神奈川県重要文化財・旧清宮家住宅は、昭和41年(1966)に現在の川崎市多摩区登戸より移築されました。生田緑地から歩いて15分ほどという、日本民家園のまさに地元の古民家です。

園内では比較的小規模な住宅ですが、江戸時代には上層農家として暮らしを営んでいました。このことをよく伝える次のような伝承が、現在も清宮家に残されています。

「富士塚の伝左衛門さんでは石の上のうちを建てて、風が吹いたら吹っ飛びやしないかって下の方から弁当持って見に来た」

「伝左衛門」とは、清宮家の当主が代々名乗った名前です。「石の上のうちを建てる」とは、礎石の上に柱を立てる工法、すなわち「石場建て」を意味しています。この伝承は、清宮家住宅が建てられた当時、周囲は柱を土に埋めるいわゆる「掘立て」式の家ばかりで、石場建てがきわめて珍しかったことを物語っています。言い換えれば、清宮家は当時の最新式の工法で建てられた住宅であり、多摩川の下流の方から弁当持参で見物に来るぐらいの値打ちがあったということです。

屋根は茅葺でした。しかし、上層農家でも葺き替えるのは大仕事であり、棟だけ、あるいは表側だけなど、部分的に行うこともあったようです。ちなみに清宮家の当主が記した明治43年(1910)の「屋根替覚帳」によると、このときは茅が1500束で15円、竹が5把で2円50銭、職人の手間賃がのべ23人で9円75銭と、材料と人件費だけで27円25銭かかっています。材料の茅を刈る茅場は、向ヶ丘遊園のあたりにありました。また、茅のほかに小麦の麦わらや篠竹も使われました。麦わらは乾燥させ、天井裏に貯めておいたそうです。なお、こうした葺き替えのときは近所で助け合うのが習慣となっていました。こうした共同作業のことを、地元では「エエシゴト(結い仕事)」と呼んでいます。先の資料によれば、このときは16人が縄や食べ物の差し入れを持って手伝いに来ています。

【暮らし】

家の中は、大きく4つの部屋に分かれています。ダイドコロ、イマ、オクノヘヤ、そしてヘヤです。

ダイドコロは炊事の間であり、食事の間でもありました。ここには流しが置かれ、井戸水を汲み置いた水ガメからヒシヤクで水を使っていました。

イマは家族の暮らしの中心でした。神棚が設けられていたのもこの部屋です。ここには畳が敷かれていましたが、夏は涼しいように畳を上げました。そのため、畳の下の床板もきれいに削ってあったそうです。

オクノヘヤは座敷であり、少し改まった場でした。節句には雛人形や五月幟が飾られ、お盆には盆棚が設けられました。祭りの直会の宿に当たったときや、念仏講の宿が回ってきたとき、人々を招き入れるのもこの部屋でした。三々九度や披露宴もここで行われましたし、里帰りした娘たちはこの部屋で子供を産んだのです。

ヘヤはいわゆる納戸です。納戸は本来夫婦の寝室であり、大切なものを納めておく場所でしたが、清宮家では大正ごろには物置となっていたようです。

土間にはヘツツイがありました。日常の炊事のほか、お茶の葉を蒸したり、餅米をふかしたりするのにも使われました。暮れには兄弟や親戚が集まり、この土間で餅つきが行われました。

家の裏には跳ね釣瓶式の井戸がありました。この井戸は多摩川が増水すると水が上がり、手ですくえるほどになったそうです。また、水に落ちた虫を食べるよう、井戸の中にはコイが飼われていました。

裏手には馬小屋もありました。しかし馬を飼っていたわけではありません。春先の農繁期だけ共同で博労から馬を借り、自分の家で使うときここにつないでおいたのです。

【災害】

清宮家住宅は、関東大震災でも倒壊しませんでした。しかし、床下に亀裂が入って傾いたため、震災後しばらくは竹やぶに蚊帳を張って眠ったそうです。

この地域で語り草になっているのは、地震よりむしろ多摩川の洪水です。かつての多摩川は暴れ川であり、流域に多くの被害をもたらしました。登戸も例外ではありません。「未年の大水」として知られる明治40年(1907)の洪水では、清宮家では押入れの中棚まで水が来たそうです。

また、明治43年(1910)の洪水のときは、裏の物置きのところまで水が来たと言います。こうしたことが、今もなお語り伝えられているのです。清宮家にはかつて、台所の土間境にドベツイと呼ばれる移動式の置きかまどがありました。これは、洪水のときでも床の上で炊事ができるよう、用意されていたものです。

【生業】

清宮家は現在建築業を営んでいますが、大工をはじめたのは明治20年代のことです。それまでは代々主に農業で暮らしを立てていました。年貢の帳付けをしていた、また薪や炭などを江戸と取引していたという話もあり、手広くやっていたのは間違いのないようです。大工をはじめて後も戦後まで農業を兼業し、米や野菜のほか、この地域で盛んだった梨や桃などの果樹栽培にも携わっていました。

大工の仕事は地元が多かったようですが、時には喜多見や和泉多摩川まで行くこともありました。戦前はリヤカーを引き、まだ橋がなかったため、渡し舟で出かけたそうです。

建築作業の節目にはいくつかの行事が行われました。まず、作業が始まる前に行われるのが地祭りです。このときは神官を呼んでお祓いをしました。どこの神官を呼ぶかは建て主が決めますが、登戸では丸山教に頼むことが多かったようです。続いて、土地を突き



▲上棟式(昭和40年)



▲上棟式のヘイグシ(昭和41年)

固める地固め、そして、柱が立つと上棟式が行われます。棟木にヘイグシと呼ばれる柱を立て、このほか鶴や亀を描いた矢を鬼門の方角に向けて取り付けます。そして祝詞を上げ、投げ餅が行われます。このあと、この建物の下で祝いの席が持たれ、棟梁送りと言って、棟木に立てたヘイグシと矢を下ろし、薦職の人々がこれを持って棟梁を家まで送りました。

(渋谷卓男)

【登戸の太子講】

登戸には、江戸時代頃から建築にたずさわる職人が多く住んでいます。建築の職人たちは一般に「太子講」を組織していることが知られています。聖徳太子は、世界最古の木造建築物である法隆寺の建立を発願しました。そのため、太子を建築の祖と考えて信仰するようになったのです。登戸の太子講は、江戸時代中期頃に結成されました。文化年間(1804~1817)には、光明院の境内に「太子堂」を建立し、嘉永3年(1850)には登戸稲荷社の再建を手がけています。また大正10年(1921)には、太子生誕千三百年記念として神代神楽を奉納しています。

登戸の太子講は現在、登戸太子講組合という名称で登戸・中野島・宿河原・堰・長尾の建築業者によって組織されています。講員は60名ほどで、地域別の14組に分かれています。現講長は、中野島で建築業を営む古谷吉郎さんで、平成17年から講長を務めています。清宮家の当主である清宮昭二さんは、平成元年から4年まで講長をしていました。

太子講組合の活動は、職人の賃金などを協議して決めていた時期もありましたが、現在は情報交換や講員の慶弔などにかかわっています。主な行事は、1月22日の太子祭と9月22日の慰霊祭です。22日に行われるのは、この日が聖徳太子の命日とされているからです。1月の太子祭には、太子堂が開扉されます。聖徳太子像に花や果物・御神酒・お札などが供えられ、一年間の無事を祈願します。お札が講員に配られた後、旧登戸宿で古くから営業している柏屋という料理店で直会を行います。この時、聖徳太子の掛軸(現在は木像)を持って行き、その前にもお膳を出します。聖徳太子にも来ていただいて、お膳を共にするのです。

(越川次郎)

清宮家関係資料



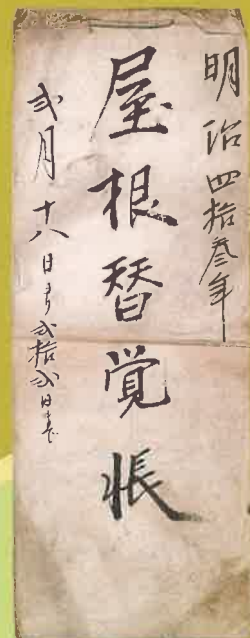
銚子

三々九度に使用されたもの



ユミハマ

長男の初正月に
親戚から贈られるもの



「屋根替覚帳」

明治43年(1910)に茅葺屋根を
葺き替えたおりの記録



カギ



貧乏徳利

「白馬不動」掛軸

白馬不動尊(山梨県上野原市)



「木花開耶姫(浅間大神)」掛軸

富士山本宮浅間大社(静岡県富士宮市)



ハクチョウ